→影媛あはれ…伝説を訪ねて山の辺の道を歩く

2019.10.13（日）カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第550回 参加報告

雨は、櫟本駅を出発する頃には止み、青空が見え始めた。駅から柿本人麻呂を顕彰する歌塚、そして古代豪族の和邇氏の祖霊を祀る和邇下神社、4世紀後半の古墳時代前期に築造され、ハニワのレリーフなどが置かれている赤土山古墳などへと進み、そこからは西名阪自動車道の側道から山の中に入って「山の辺の道」である。影媛と鮪の史跡「布留の高橋」へ行く前に昼食を摂るため、石上神宮の外苑公園に立ち寄った。食後、石上神宮本殿を拝観、別の道を戻ってようやく「布留の高橋」である。その名板がある橋の下の瀬は速く、小さな滝が落ちていた。ここが『日本書紀』に「石上 布留を過ぎて　薦枕(コモマクラ)　高橋過ぎ物さわに大宅過ぎ　春日(ハルヒ)春日(カスガ)過ぎ　嬬隠る小佐保を過ぎ　玉笥(ケ)には飯さへ盛り　玉椀(タマモヒ)に水さへ盛り　泣きそぼち行くも　影媛あはれ」と記される事件の現場だ。彼女が走り抜け、駆け付けた時、すでに鮪は討ち取られていたのだ。鮪は、少しはまだ息をしていただろうか、それとも絶命していたのか、その辺りは書かれていないが、『古事記』では、海柘榴市の歌垣で袁祁王(をけのみこ、後の顕宗天皇)が、菟田首(斗田首：うだのおびと)の娘の大魚(おうめ)をめぐって志毘(しび)と争っている。顕宗天皇は武烈天皇の前々代であるから、この事件が起こった時期も『日本書紀』とは違う。

いずれにせよ、鮪や父親の真鳥が平群氏であったことが、気になった。平群氏は、生駒の平群町に拠点を置いた一族で、後に紀氏もこの一族から分かれ、和歌山に移っている。そして、この時代に「平群真鳥は絶大な力を保持し、国政をほしいままにしていた」とあるので、平群氏の勢力が強大で、それを苦々しく思っていた天皇と大伴氏が平群一族を打倒するために動いたとする方が、筋が通るのだろう。

この話を題材にして書かれた小説が、高尾長良の「影媛」だ。モチーフは『日本書紀』に記された物語で、大筋は『書紀』のそれと同じだが、歌物語を軸に取り入れて展開され、古歌のような文体が全体の物語の雰囲気を押し上げている。残念ながら芥川賞候補(2014年、第152回)にとどまったが、京都大学医学部在学中の 2012 年には「肉骨茶(にくこつちゃ)」で新潮新人賞を20歳の最年少で受賞(後2013年芥川賞候補)していて、将来が嘱望される作家だと思う。

＜報告：田淵浩一＞